

『源氏物語』「さだ過ぐ」考

吉海 直人

〔要旨〕『源氏物語』の「さだ過ぐ」に注目し、広く用例を調査したところ、『源氏物語』の用例が突出して多いことがわかった。また初出の『万葉集』から『うつほ物語』までは「時期を逸する」意味で用いられていたものが、『枕草子』以降は「盛りを過ぎる」意味に転換していることもわかった。『源氏物語』においては、三十歳台から五十歳台までの幅広い年齢に用いられている。特に滑稽味を出した源典侍の五十歳台の例や、自嘲的な朝顔斎院・宇治大君の三十歳前後の例が特徴的であった。『源氏物語』は「さだ過ぐ」の多用によって、幅広い年齢層の多様な恋物語を展開しているといえよう。

紅葉賀巻を読んでいて、源典侍の紹介記事にある「さだ過ぐ」という言葉に目がとまった。その本文は次のようになって
いる。

年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく心ばせありて、
あてにおぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心
ざまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ぐるま
で、などさしも乱るらむといぶかしくおぼえたまひければ、
戯れ言いひふれてこころみたまふに、似げなくも思はざり
ける。
(新編全集紅葉賀巻 336頁)

好色な老女源典侍について、最初に「年いたう老いたる」とある
ので、後の「さだ過ぐ」はそれなりの高齢を想定してよさ
そうである。その後、頭中将が加わっての三つ巴の茶番劇の中

で、

五十七八の人の、うちとけてもの思ひ騒げるけはひ、えならぬ二十の若人たちの御中にて物怖ぢしたるいつきなし。

(同343頁)

と源典侍の実年齢が明らかにされ、その上で二十歳前後の若い源氏や頭中将との年齢差を強調することで、一層滑稽味を醸しだしている。これについて新編全集の頭注には、

ここではじめて典侍の年齢が明記される。前の「年いたう老いたる」「かうさだ過ぐる」からは、せいぜい四十歳台と想像されるだろうから、六十に近いとは意外である。それだけに、彼女の好色な行爲がいつそう不似合いである。

(341頁)

という示唆的な指摘がされていた。「かうさだ過ぐる」を一般的な「盛りを過ぎる」意味にとると、老女ではなく四十歳台を想定するのが妥当なので、「五十七八歳」を想像することは難しいとのことである。しかしながら「年いたう老いたる」の方からは、「四十歳台」をはるかに超えた年齢を想像してもおかしくないのではないだろうか。この点の整合性がいささか気になるところである。

もう一つ、「さだ過ぐ」には源典侍よりずっと若い年齢の例が存している。それは朝顔斎院が、

世の末に、さだ過ぎつきなきほどにて、一声もいとまばゆからむと、思して、
(朝顔卷485頁)

と述懐している箇所である。帚木巻に朝顔斎院が噂の中で初登場して以来、既に十六年の歳月が経過している。年立によれば、この時源氏は三十二歳である。そのことを踏まえて小山利彦氏は、「朝顔が「さだすぎ」たと自覚している年齢は三十歳台ということになる」としておられる。

ただし朝顔斎院の年齢に関しては、登場以来まったく情報が提示されておらず、源氏と同年齢かどうかさえもわからない。むしろ若い頃の源氏の相手は、源氏より年長の女性ばかりなので、朝顔斎院も年長と見る方が自然ではないだろうか。

それにしても小山氏の三十歳台(後半?)という推定は妥当な見解と思われる。ここに至って「さだ過ぐ」には、三十歳台から五十歳台までの幅広い年齢が許容されることになる。この大雑把ともいえるところえ方で問題はないのだろうか。

二

そこで取りあえず「さだ過ぐ」の用例を調べてみたところ、案外用例数が少ないことがわかった。そのためか古語辞典を見ても、「さだ過ぐ」が立項されていないことが多かった。おそらく「さだ過ぐ」という一語としてではなく、「さだ＋過ぐ」という二語としてとらえられているのであろう。必然的に古語辞典では「さだ」という名詞で立項されているわけだが、それにもかかわらずそこに引用されている用例は、すべて「さだ過ぐ」であつた。

これに関しては、『古典対照語い表』（笠間書院）も同様の扱いである。やはり「さだ過ぐ」項はなく、「さだ」項で立項されているからである（資料としている総索引類の編集方針に問題があるのかもしれない）。ちなみにそこに掲載されている用例は、

万葉集二例　枕草子一例　源氏物語十五例
紫式部日記三例　更級日記一例
の総計二十二例（五作品）であつた。これに『源氏物語』の複合語「さだ過ぎ人」一例が追加されている（総計十六例）が、

それにしても作品の広がりが乏しいという印象を受ける。

ここまで来て、「さだ過ぐ」についてもつときちんと調べてみたくなったので、先行研究があるかどうか調べてみたところ、望月真氏の「「さだ過ぎ人」考」（国語展望35・昭和48年11月）が見つかった。題名こそ「さだ過ぎ人」になっているが、内容は「さだ過ぐ」の用例を広く調査したものであり、参考になることが多い。その中で望月氏は、

「さだ過ぐ」は盛りの年が過ぎる意で、それも「女の盛りなるは」に見られるように多く女性の場合にいう。

（64頁）

と妥当な結論を述べられている。私の関心とは多少ずれているが、ここで「多く女性の場合にいう」と指摘されている点には留意しておきたい。

あらためて「さだ過ぐ」の用例を広く調べてみたところ、次のような結果になった。

万葉集二例　うつほ物語一例　枕草子一例
和泉式部集一例　源氏物語十六例　紫式部日記三例
更級日記一例　浜松中納言物語一例　夜の寝覚五例
狭衣物語三例　栄花物語三例　とりかへばや一例

これによれば十二の作品に計三十八例が使用されていることになる。用例数は『古典対照語い表』より十六例の増加に留まるが、作品の数は二倍以上に広がった。この調査結果から、初出は『万葉集』ということになりそうだと。

ここで前述の「さだ」の用例と比較してみたところ、掲載されていた五作品の用例数は完全に一致していた。要するに「さだ」単独では一切使用されておらず、「さだ過ぐ」という形でのみ用いられていることがわかる。

そのことは小学館『古語大辞典』の「さだ」項に、

さだ〔名〕時。特に、盛りの時。青春。「しだ」⁽³⁾とも。

多く「さだ過ぐ」の形で用いられる。

と解説されていることから明らかである（「多く」とあっても、単独例はあげられていない）。『角川古語大辞典』ではさすがに「さだ過ぐ」で立項されており、

「さだ」が過ぎる意で、ことをなすによい時期を逸することをいう。男の壮年期を過ぎること、女の年ごろを過ぎることを用いる。

と説明されている（男女で微妙なニュアンスの違いが感じられる）。これによれば、望月氏の言われている女性の例だけでない

く、男性の用例もあることになる。ただし源典侍のような老人という解釈はどこにも提示されていない。となると源典侍の例は特殊（例外）なのであろうか。

用例全般から言えることは、まず上代に既に用例があること、しかも歌語として用いられていることである。平安朝においても『和泉式部集』では和歌に用いられており、少ないながらも歌語として『万葉集』を継承していることになる。その上で紫式部にかかわる『源氏物語』十六例・『紫式部日記』三例が突出していることに気づく（全用例数の半分）。既に『和訓栞』に「源氏物語に多き詞也」⁽⁴⁾と指摘されているように、「さだ過ぐ」は『源氏物語』の特殊用語と言えそうだと（もちろんほとんどの語の用例数は、分量の多い『源氏物語』が突出しているのだが）。それは『源氏物語』が恋物語であること、また女性の心内を描き出しているからでもあるだろう。

その『源氏物語』の影響を受けてか、『源氏物語』以前よりも以後の平安後期物語において用例がやや増加している。具体的には『夜の寝覚』五例・『狭衣物語』三例・『浜松中納言物語』一例である（ここに『更級日記』一例を加えて計十例にすることもできる）。それにしても用例の広がりには意外に少ない。

次に手順として、『源氏物語』以前の用例を検討しておこう。
『万葉集』の二例は次の二首だが、重複歌と見てよさそうである。

沖つ波へ波の来寄る左汰の浦このさだ過ぎて後恋ひむかも

(万葉集二七三二)

沖つ波へ波の来寄る貞の浦このさだ過ぎて後恋ひむかも

(万葉集三一六〇)

「左汰の浦」も「貞の浦」もともに所在地未詳である。ここでは上の句が同音の「さだ」を導く序詞として用いられている。意味については新編全集の頭注に、「この機会を逸しては」と記されている。これは『角川古語大辞典』の「よい時期を逸する」という説明と一致している。

興味深いのは、頭注に「適時・盛時が過ぎる意の中古語サダスギもこれから出たものであろう。」とコメントが施されている点である。ここでは『万葉集』と中古では意味が異なっていることに留意したい。

以上のことを私なりにまとめれば、『万葉集』の用例が「機

会(時)を逸する」という意味であるのに対して、中古では同じ語が「盛り(適齢期)を過ぎる」の意味に大きく変容・転換していることになる。それも『源氏物語』の表現の特徴の一つだろうが、ではどこからそれが始まっているのだろうか。そこで平安時代の用例の中で一番早い『うつほ物語』の例を検討してみたい。

大将、「さだ過ぎたることになむ。梨壺の御ことなり」

(蔵開卷496頁)

これについて新編全集の頭注には、「時機を逸したことです」とある。とすると『うつほ物語』は、散文ながらも『万葉集』の用法と同様であり、「盛りを過ぎる」意味では使用されていないことになる。そのことはさらに『和泉式部集』の歌も同様であった。

木幡僧都の家焼けたる、人づていひやるがはしに

出でにける門のほかをし知らぬ身はとふべき程もさだ過ぎにけり

(和泉式部集四八四)

かへし

とはぬをも恨むる心今はなし車にのらぬ程ぞうかりし

(四八五)

こゝは仏教を踏まえた贈答になっているが、やはり『万葉集』と同様に「時機を逸する」意味になっている。こうなると前述の『万葉集』の頭注にあった「中古語」云々は修正が必要になってくる。少なくともここにあげた『うつほ物語』と『和泉式部集』の用例は、平安時代の作品でありながらも『万葉集』の用法を継承しているからである。

そのことは『小学館日本国語大辞典』の説明によって確認することができる。というのも「さだすぐ」項に、

①それに適した、またはつごうのよい時が過ぎる。時機を失する。

という意味の説明の事例として、『万葉集』・『うつほ物語』・『和泉式部集』の例が並べて掲載されているからである。そうすると明確に上代と中古で「さだ過ぐ」の意味が変容しているわけではなく、微妙に重なっていることになる。

また二つ目の意味として、

②盛りの年齢を過ぎる。年老いる。また年寄りじみる。

とあり、その事例として『枕草子』・『栄花物語』の例が引用されている（何故かここに最も用例の多い『源氏物語』の引用がない）。そこであらためて『枕草子』の例を調べてみたところ、

いとさだ過ぎ、ふるふるしき人の、髪などもわがにはあらねばにや、
（新編全集七九段143頁）

とあった。これは下に「ふるふるしき人」とあって、いかにも老人を想起させるが、実は清少納言自身のことを自虐的に述べたところである。頭注には「作者自身のこと。この年三十歳ぐらいか」と記されている。「いと」とあつても意外に若いのではないだろうか。

どうやら「さだ過ぐ」の古い用法は、「時機を逸する」という意味であり、それが『枕草子』に至って、唐突に「盛りを過ぎる」意味に転用されたことになりそうだ。もちろん「時機を逸する」と「盛りを過ぎる」には重なる点もある。

四

次に用例の多い『源氏物語』の用例を検討してみたい。試みに巻毎に分類してみたところ、内訳は以下のようなになった。三例以上ある巻は見当たらないので、特定の巻に用例が集中しているわけではなさそうである。傾向としては宇治十帖にやや多いといえる。

若紫卷二例 紅葉賀卷二例 朝顔卷一例

少女卷二例 若菜下卷二例 竹河卷二例

橋姫卷二例 宿木卷一例 手習卷二例

続いて内容を検討した結果、『万葉集』を継承するような「時機を逸する」意味の用例は皆無であることがわかった。やはり『枕草子』に至って、言葉の意味が大きく転換しようだ。

さらに使用されている人物毎に分類してみたところ、顕著な傾向が認められた。それは「さだ過ぎ」が二つの意味に分かれていることである。一つは「年寄る・老いる」という意味で用いられている例、もう一つは必ずしも老齢ではなく、「女の盛りが過ぎた」意味で用いられている例である。

「年寄る・老いる」の意味で用いられている人物として、前述の源典侍以外に弘徽殿・弁の尼・小野の妹尼などがあげられる（すべて年齢が高い）。

まず源典侍だが、最初にあげた例に加えてもう一例、

手はいとさだ過ぎたれど、よしなからず（紅葉賀卷337頁）

があげられる。これは「手は」とあるように、年齢ではなく筆跡についてのコメントなので、間接的な用法ということになる。

ついでながら源典侍の歌に、

君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なり
とも（紅葉賀卷338頁）

と「さだ過ぎ」に近い「さかり過ぎ」が用いられていた。源典侍は六十近い老女であっても、好色でまだ現役の女性として描かれているので、「さだ過ぎ」が皮肉を込めて一般例より高齢になっているのかもしれない。

次に桐壺巻に登場していた弘徽殿太后のことが少女巻に至って、

いたうさだ過ぎたまひにける御けはひにも、（少女巻74頁）

と記されている。頭注には「太后はこのころ五十七、八歳くらいか」と記されており、前述の源典侍とほぼ同年齢であった。

もちろん弘徽殿は決して好色ではないので、この場合は長寿の弘徽殿と早世した藤壺の対比に主眼があると考えられる。

続いて宇治十帖の弁の尼の例が三例あげられる。

・したたかに言ふ声のさだ過ぎたるも、かたはらいたく君たち
ちは思す。（橋姫卷143頁）

・おほかた、さだ過ぎたる人は涙もろなるものとは見聞きたまへど、（橋姫卷145頁）

・ほかにては、かばかりにさだ過ぎなん人を、何かと見入れ

てあまふべきにもあらねど、
(宿木457頁)

五

橋姫巻における弁の尼の年齢は、「弁の君とぞいひける。年は六十にすこし足らぬほどなれど」(159頁)とあるので、やはり源典侍・弘徽殿とほぼ同年齢であることがわかる。宿木巻の例を含めて、弁の尼は三例もの「さだ過ぎ」によって、老女であること(過去の女性であること)が強調されていることになる。

もう一人、浮舟を救った小野の妹尼についても、

かくさだすぎにける人の心をやるるをりにつけては
思ひ出づ。
(手習巻302頁)

と記されている。当時尼君は五十歳くらいとされているので、五十歳台ではあるものの、他の女性よりは少しだけ若返ったことになる(たいした違いは認められない)。ついでにもう一例、

さだすぎたる尼額の見つかぬに、もの好みするに、
(手習巻326頁)

もあげておきたい。詳細未詳だが、これは妹尼に仕える少将の尼(女房)のことである。「見つかぬ」は髪が薄くてみつともないという意味なので、年齢もほぼ同じと見てよからう。なおこの二例は、既に出家して尼になっている人の例である。

以上の例はかなりの年配(老人)であったが、先の『枕草子』の用例では、三十歳前後の清少納言が「さだ過ぐ」を口にしていた。そこであらためて清少納言に近い例として、『紫式部日記』の例を検討してみたい。

さだすぎたりとつきしろふも知らず、扇をとり、たはぶれ
ごとはしたなきも多かり。
(紫式部日記164頁)

これは右大臣顕光を揶揄したものである。頭注には「盛りの年齢を過ぎること。右大臣顕光は当年六十五歳。」と記されている(用例の中で最高齢者か)。女房にちよつかいを出している顕光に対して、「盛りの年齢を過ぎる」というのでは適訳ではあるまい。むしろ積極的に「年寄り」であることを表に出して、自分の年齢も弁えずという批判・批難が込められていると見る方がよさそうである。

二つ目の用例は左京の君(女房)のことである。

すこしさだすぎたまひにたるわたりにて、櫛のそりざまな
むなほなほしき。
(同181頁)

この左京の君の年齢は不詳であるが⑤、「すこし」とあるの

でまださほどの年寄りではないのかもしれない。これに関しては情報不足なので保留とせざるをえない。そのすぐ後に三つ目として紫式部自身のことが、

さだすぎぬるをかうばかりにてぞかくろふる。(同182頁)

と記されている。あるいは前の左京の君の例と連動しているのかもしれない。紫式部についても正確な生没年が未詳なので、この何歳だったかは特定できない。これに関して前述の小山利彦氏は、紫式部天元元年(九七八年)出生説に依拠されて、当時(寛弘五年)の年齢を三十一歳と想定されている^⑥。そうなると清少納言・紫式部・朝顔斎院の年齢が三十歳台でほぼ横並びになる。妥当な見解であろう。

参考までに望月氏が提示されている『梁塵秘抄』の、

女の盛りなるは、十四五六歳廿三四とか、三十四五にし成ぬれば、紅葉の下葉に異ならず。
(新編全集291頁)

をあげておきたい。これに依拠すれば、確かに三十歳台は既に女の盛りを過ぎていることになるからである。また賀茂真淵の『源氏物語新釈』の注にも、

人の定は三十なり。それ過ぐるをさだ過ぐるといふ。(中略)此内侍は末に五十七八といへば上にとしいたうおいた

ると云は実なり。(『賀茂真淵全集十三卷』261頁)

と注されている。ただし宇治八宮の大君が、

盛り過ぎたるさまどもに、あざやかなる花の色々、似つかはしからぬをさし縫ひつつ、ありつかずとりつくろひたる姿どもの、罪ゆるされたるもなきを見わたされたまひて、
姫宮、我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし。

(総角巻280頁)

と自らを述懐している例もある。大君は当時まだ二十六歳であり、「さだ過ぎ」たとする朝顔斎院等よりさらに若かった。これは必ずしも一般例ではなく、大君自身の考え方の特徴であろう。このことが大君の結婚拒否の根底にあるのかもしれない。

六

もう一つ、その中間層として祖母尼君・花散里・源氏・冷泉院・玉臺の例が存在する。これはほぼ四十歳台である。ここで一つの目安として、四十歳(老人の仲間入り)を超えるか否かという線引きもできそうである。

まず紫の上の祖母尼君だが、

・さだ過ぎたる御目どもには、目もあやに好ましく見ゆ。

(若紫卷 228頁)

・年ごろも、あつしくさだすぎたまへる人に添ひたまへる、

(同 248頁)

の二例が見つかった。前の例の頭注には、「盛りの年齢を過ぎた尼君たちの」と記されている。祖母あるいは尼君とあると、もっと高齢を想像しがちだが、若紫巻における祖母尼君の年齢は、まだ「四十余ばかり」(206頁)とあった。もちろんそれは源氏による推定年齢であるから誤解も混じっているようだが、それでも四十歳台と見てよさそうである。

次に花散里の例は、

もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、瘦せ瘦せに御髪少ななるなどが、かくそしらはしきなりけり。

(少女卷 68頁)

とある。花散里の正確な年齢もわからないものの、これは源氏三十三歳以降なので、源氏よりかなり年長の花散里は、ここで四十歳前後と見たい。もちろん「やや」を重視して三十歳後半でもかまわない。案外、花散里と朝顔斎院は同世代かもしれない。

次に竹河巻の冷泉院と玉鬘の例を見てみよう。

・今は、まいて、さだ過ぎすぎまじきありさまい思ひ棄てたまふとも、

(竹河巻 61頁)

・今日は、さだ過ぎにたる身の憂へなど聞こゆべきついでにもあらずとつみはべれど、

(竹河巻 108頁)

前の例は冷泉院の卑下を含む表現であり、後の例は玉鬘が薫に向かつて卑下している例である。しかし薫の目には、

古りがたくもおはするかな、かかれば、院の上は、恨みたまふ御心絶えぬぞかし。いまつひに、事ひき出でたまひてん、と思ふ。

(竹河巻 108頁)

と若々しく映っている。玉鬘は娘の大君を冷泉院に入内させることになるが、当時冷泉院は四十三歳、玉鬘は四十八歳であった。ここでは過去の二人の記憶が想起されることで、両者相互に時間の経過を意識して「さだ過ぎ」が使用されているのであろう。

最後に光源氏の例として、

・また今は、こよなくさだすぎにたるありさまも、侮らはしく目馴れてのみ見なしたまふらむも、

(若菜下巻 269頁)

・さだすぎ人をも、同じくならずらへきこえて、いたくな軽め

たまひそ。

(若菜下巻 269頁)

の二例をあげたい。当時源氏は四十七歳であった。ここは近いところに二例集中しているのが特徴である。これは女三の宮と柏木の密通を前提として、若い柏木と対照的に自らの老いを自嘲しながら、女三の宮を訓戒しているところである。そのためか「さだ過ぎ人」は、この一例以外に用例の認められない特殊表現(造語)であった⁷⁾。

こうしてみると、「さだ過ぎ」は、原則四十歳過ぎというところで、過半数の例が処理できそうである。しかも源氏を含めた男性の例は、すべて四十歳以降であった。ここで『角川古語大辞典』に「男の壮年期を過ぎること、女の年ごろを過ぎることに用いる。」とあったことが想起される。あるいは「壮年期を過ぎること」が四十歳台、「年ごろを過ぎること」が三十歳台と、男女で使い分けされているのかもしれない。

また「さだ過ぎ」だけに、女性に用例が集中していることも、望月氏の指摘されている通りである。加えてそれが恋愛感情と密接に関わっていることも指摘しておきたい。その上で、自らを卑下する場合は、女性は三十歳・男性は四十歳というのが一般的な「盛りが過ぎる」にふさわしい年齢設定ではないだろう

か。それに対して源典侍のような高齢の場合は、他者による批判を含む特殊用法と言えそうである。

七

最後に『源氏物語』以後の用例を一渡り見ておきたい。まずは『栄花物語』だが、なんとすべて後一条天皇の皇后威子に用例が集中していた。

・かくさだすぎ、何ごとも見苦しき有り様にて、

(栄花物語殿上の花見 192頁)

・わが方ざまは何ごともしさだすぎ、うちとけあやしき目移しに、

(同 195頁)

・ましてさだすぎなどせさせたまふべきにはあらず。

(歌合 228頁)

当時、威子は「中宮はこのごろぞ三十二ばかりにおはします」(195頁)とあるように、「殿上の花見」巻では三十二歳、また「歌合」巻では「三十五六」(228頁)であるから、それこそ三十歳台の卑下の例と見てよさそうである。

次に『更級日記』を見ると、

年はややさだ過ぎゆくに、若々しきやうなるも、つきなう
おぼえならるうちに、
(更級日記 354頁)

と出ていた。菅原孝標女が宮仕えしたのは三十一歳とされているので、これも自身の卑下の例と見てよからう。その孝標女の作ともされている『夜の寢覚』には、『源氏物語』に次ぐ五例もの用例が用いられているが、そのうちの四例は寢覚の上の老関白に集中していた⁽⁸⁾。

・深うはあるまじかりし齡に、さだすぎたまへりし人にゆき
かり、
(卷三 261頁)

・今はおのれは、さだ過ぎにたるに、いとあなづらはしく思
ひはべるめるを、
(卷三 265頁)

・故大臣、さだ過ぎたまへりしかど、いとこちごちしく、わ
ららかにやさしかりし人の、
(卷五 488頁)

・すこしさだ過ぎ、世のつねのなべてのさまなりし昔の御心
のみ恋しく、
(卷五 540頁)

『夜の寢覚』には明らかに用例の偏りがあり、「さだ過ぎ」を寢覚の上の夫であった老関白という人物のキーワードとして、意図的に用いていると考えられる。その老関白の年齢は不詳だが、設定としては『紫式部日記』の顕光のような老人のイメー

ジがふさわしいのではないだろうか(ただし性格面は別)。

『狭衣物語』の三例は次のようなものである。まずは狭衣の母宮が源氏の宮の代筆することについて、

されば、さだ過ぎたまふらんはいかがとおぼへはべるなり。
(卷二 243頁)

と卑下している。当時二十歳くらいの狭衣であるから、その母は四十歳前後であろうか。

次は狭衣から送られてきた後朝の文を見ての女院の言葉であるが、

さだ過ぎたらんは、かたはなるべければ、ことさらばかり。
(卷三 109頁)

とある。これが一品の宮のことであれば三十歳くらいでちょうどいいが、その母である女院となると五十歳近くになるかもしれない。

続いて年配の女房の言葉として、

大人しき人々は、「かやうのさだ過ぎたるさまにては、さ
し出でにくくはべりけり。」
(卷三 156頁)

とあるが、これだけでは年齢の特定はできそうもない(さほどの老齢でもなからう)。

次に『浜松中納言物語』の例は、乳母の娘のことが、

乳母のむすめどもぞ、三人ばかりきたなげなくてありける。

それもみなさだ過ぎ、おとろへて、大姉は尼になりにき。

いま二人はねびにたる姿にて、（浜松中納言物語224頁）

とあって、それなりに年を取っているようであるが、情報不足で年齢の特定はできそうもない。最後に『とりかへばや物語』の例は、

その中にまた、年さだ過ぎたまひにたる親のいたづらになりたまひぬべきがいといみじくはべるなり。

（とりかへばや物語356頁）

であり、頭注には「左大臣の年齢は不明。「年さだ過ぎ」とあるが、女君が十九歳であるから、四〇代半ばあたりと見てよい」と記されている。「四十代」という設定に資料的根拠は認められないものの、それは女君の誕生時点で父の年齢を二十五歳くらいと推定して計算しているのであろう。ここでは便宜的に四十歳前後と見ておきたい。

まとめ

以上、「さだ過ぎ」という言葉に注目して、その用例を広く検討してきた。ここであらためて考察をまとめておきたい。まず『万葉集』の用法と『枕草子』以降の用法が異なっていることがあげられる。また『枕草子』以降の作品がほとんど女流文学に偏っていることで、男性よりも女性に用いられる場合が多いことも特徴の一つである。それに連動して、「さだ過ぎ」た人物が尼になっている例も少なくなかった。

原則として、「さだ過ぎ」は老人の域とされる四十歳を過ぎた人に用いられると見てよさそうである。その使用範囲は当然老人の域に入る四十歳台が最も多いが、五十歳台・六十歳台にまで及んでいる。むしろ高齢の場合は、源典侍の例のように批判や滑稽味を含んでいると言えそうだ。なお源氏や冷泉院といった男性の用例は、女性より十歳ほど年齢が高くなっている。それは盛りの期間が女性よりも長いからかもしれない。

特例として、三十歳台の女性の例もあったが、その場合は自身による卑下や謙遜を伴っていることがほとんどである。特に朝顔斎院の例は、結婚拒否と深く関わっていると考えられる。

〔注〕

づらをする」(182頁)と記されている。

(1) 小山利彦氏「朝顔の周辺と斎院御禊のこと」(『源氏物語
宮廷行事の展開』おうふう・平成3年9月)

(2) 三省堂『全訳読解古語辞典第四版』(2013年)を見ると、
「さだ」と「さだすぐ」の両方が立項されていた。しかも
「さだすぐ」の意味として、ようやく「年老いる」が出て
いた。

(3) 「しだ」に関しては『角川古語大辞典』の「さだ」項に、
「上代東国語の「しだ」と同じで、後世、動詞の連用形に
接して「行きしな」などと用いる「しな」は、その転とい
う」と解説されている。

(4) これより以前、契沖の『万葉代匠記』にも「源氏物語な
どに多き詞なり」(契沖全集五卷212頁)とある。なお初稿
本の「此さた過ては、此比過ての心なり」が、精選本で
「此左大過ては年の比の過るなり」と修正されているのは、
『源氏物語』の用法を知ってのことであろう。

(5) 頭注には、「もと内裏女房の左京が舞姫の付添のような
落ちぶれた役で来ているのを見つけてわざわざ凝ったいた

(6) 小山利彦氏「さだ過ぎた朝顔の斎院——光源氏の皇権と
の連関——」『源氏物語の鑑賞と基礎知識 33 薄雲・朝顔』
(竹林舎・平成16年4月) 参照。ただし今井源衛氏の天禄
元年(九七〇年)説もある(『紫式部』吉川弘文館)。少な
くとも「さだ過ぐ」を根拠にして今井説を排除することは
できそうもない。

(7) 源氏に関しては、四十の賀以後に「過ぐる齡」という類
義語が四例集中して用いられている(若菜上57頁・若菜下
273頁・若菜下280頁・鈴虫386頁)。また『源氏物語』以前で
は『古今集』八九六番・八九八番・『伊勢物語』五一段に
用いられており、本来は歌語だったことがわかる。

(8) 残りの一例は、大皇の宮の述懐で、
こよなうさだ過ぎたまへりし、世のつねの人さまに、
ひき移され、(巻四388頁)
である。